早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書（Web 公開用）

申請者（ふりがな）	徐 桜晗　（　じょ おうかん　）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	博士課程 3 年
発表年月 または事業開催年月	2025 年 9 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第 66 回日本社会医学会総会
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	徐 桜晗，渡邊 朋恵，矢口 舞，齋藤 篤，扇原 淳
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	神奈川県における刑法犯認知件数と気候との関連

発表の概要と成果（抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。）

【背景・目的】地球温暖化の進行により，日本でも 2023 年度の年平均気温が観測史上最高を記録した．気候変動は熱中症や感染症流行の変化のみならず，犯罪にも影響する可能性が指摘されている．海外研究では気温と暴力犯罪に非線形の関連が示され，国内研究でも正の関連が報告されているが，地域性や近年の動向を踏まえた検討は不十分である．本研究では神奈川県を対象に，刑法犯認知件数と気候要因との関連を検討した．

【方法】2011 年 1 月～2023 年 12 月の神奈川県における月別刑法犯認知件数を警察庁統計から収集し，人口データと横浜市の気象データ（平均気温・降水量）を加えた．STL 分解により季節変動と長期傾向を把握し，Spearman の順位相関で気候要因との関連を分析した．

【結果】刑法犯認知件数の推移を確認した結果，犯罪総数および凶悪犯，粗暴犯，窃盗犯，その他の刑法犯は期間中に有意に減少していた（いずれも $p < 0.001$）．一方で，風俗犯は有意に増加していた（$p < 0.05$）．季節性の傾向として，犯罪総数は 5 月および 7~11 月に増加し，1~2 月に減少する傾向がみられた．粗暴犯は 5 月，7 月，10 月，11 月に多く，1 月と 2 月が最も少なかった．窃盗犯は夏季および 12 月にピークを迎え，1 月に最も少なく，ほかの罪種と比較して季節的変動の幅が最も大きかった．

刑法犯認知件数と平均気温および降水量との関連について Spearman の順位相関分析を実施した結果，年間平均気温と刑法犯認知件数の関連では，凶悪犯（$rs = -0.58$），粗暴犯（$rs = -0.73$），窃盗犯（$rs = -0.73$）との間に有意な負の関連が見られた（いずれも $p < 0.05$）．また，冬季平均気温と刑法犯認知件数の相関では，凶悪犯に負の相関（$rs = -0.61$），風俗犯に正の相関（$rs = 0.63$）がみられた（いずれも $p < 0.05$）．降水量に関しては，夏季降水量と凶悪犯との間にのみ有意な負の相関がみられた（$rs = -0.73$，$p < 0.01$）．

【考察】犯罪の長期減少は防犯体制や制度の変化の影響が考えられる．季節的傾向は海外研究と類似するが，一部は先行研究と異なり，地域性や期間の違いが示唆される．罪種ごとに異なる関連がみられたことから，制度・防犯意識・犯罪形態の変化が複合的に作用していると考えられる．今後は全国的データや都市構造を考慮した分析が必要である．

※無断転載禁止